



垣田秀治氏

国保京丹波町病院病院長

畠中源一氏

京丹波町町長

人口減少時代の地域医療をどう守るか 畠中町長×垣田病院長が語る京丹波町の挑戦

人口減少と高齢化が急速に進む中山間地域において、地域医療をいかに維持し、町の活力につなげていくか。合併から20年を迎えた京都府京丹波町では、「ウェルネスタウン構想」を掲げ、健康を軸としたまちづくりを進めている。本対談では、合同会社デロイトトーマツで病院経営のコンサルティングを手掛ける古株靖久氏がファシリテーターを務め、再選を果たした畠中源一町長と、40年近く地域医療に携わってきた国保京丹波町病院の垣田秀治病院長に、行政と医療それぞれの立場から、超高齢化社会における医療の役割、人材確保、病院経営の課題、そして地域と病院のあるべき関係について語り合った。

古株

まず町長にお伺いします。

京丹波町が掲げておられる地域医療政策、そしてウェルネスタウン構想は、どのような問題意識から生まれたものなのでしょうか。

畠中町長 昨年11月の町長選挙で再選し、二期目を担わせていただきました。一期目に掲げた公約の柱は、「食と健康のまちづくり」「教育・子育てのまちづくり」「ふれあいのまちづくり」の三つです。京丹波町は農産物をはじめ、非常に食材に恵まれた地域です。おいしいものをきちんと食べ、心身ともに健康で過ごしていただくことが、町の活力につながると考えています。

一方で、人口減少は避けられない現実です。合併当初は約1万7千人いた人口が、現在では約1万2千人まで減少しました。これは課題というよりも大きな時代の流れです。そのなかで、過疎だ

ウェルネスタウン構想の背景

地域医療政策と